

討論：軍事力による抑止を問う——軍隊体験を持つ者からの問題提起

木村雅夫

暖かな二月二六日夜、文京区民センターで、軍隊体験を持つ政治学者石田雄さんからの問題提起に、田浪重央江さんと杉原浩司さんが現在の問題意識で答え、七五年の時間幅でかつ日中から中東まで広い空間にまたがって「抑止力」を考えた。

二・二六事件（一九三六年）の直後に父親が警視總監になった石田雄さんは、拳銃と機関銃の恐ろしさを目の当たりにして武器恐怖症になった体験から話し始め、三木清の影響を受けて軍国青年になり、学徒出陣で自分の手で人を殺さないといけないことを初めて実感し、軍隊では言葉を失って「ハイ」のみしか応答しなくなり、また大隊本部では人殺しの現場が遠くなってしまうことなどの体験談とともに、現在の抑止、日米安保条約の変遷、戦前の抑止論、加害の意識化などについて語った。

当日早朝の「朝まで生テレビ」の「抑止力」議論の紹介から話し始めた杉原さんは、「抑止力」論は軍事力維持・強化の方便に過ぎないと主張、それ故「動的な」軍縮外交の復権と「軍縮計画の大綱」とロードマップの練り上げを提案した。

イスラエルから戻ってきたばかりの田浪さんは、日本における「抑止力」の曖昧さを述べ、冷戦終結期および湾岸戦争をきっかけとした国際貢献論台頭期に安保システムを大衆的な議論にのせられなかったことを指摘し、一方イスラエルが不釣り合いに過剰な軍事的報復をし国際世論を重視しない究極の「抑止論」国家であることを論じた。

以下では、二時間半の討論の一部を抜粋して紹介する。

問題提起——石田雄

二・二六の悪夢

今日は暖かいが、七五年前の寒い二・二六の悪夢を思い出す。自伝でも

触れていない。個人的経験だけれど武器の問題と関係するので話す。学校で二年下の渡辺和子さんのお父さん陸軍教育総監渡辺錠太郎が彼女の見ている前で機関銃で殺された。神奈川県知事であった父が警視總監に任命され三月一三日に半蔵門に移った。しばらく反乱軍が占拠していたが、三ヶ月後に私も半蔵門官舎に来た。そこからが悪夢。毎日父は拳銃を枕元に置いて寝ていた。殺人事件があると夜の夜中に報告に来て起こされる。その度に私は機関銃が来るかとびくびくし便所にいけなくなった、電気を点けると向こうから機関銃でやられるのじゃないかという妄想に取りつかれた。一番参ったのは父で、一切笑うことが無くなり鬱病になって八月月で辞任し、自宅に帰ってもっぱら静養することになった。私も不眠症になり、腎臓から血を出して、鬱でやられた。時々拳銃を思い出させられた。天皇が原宿の宮廷用の駅に来る度に、明治神宮の近くの家に警察が拳銃と弾の数を調べに来た。父が拳銃はいらぬから軍隊にやってくれと戻して漸く解放された。

第二の悪夢

これで第一の悪夢から解放されたけれども、それから当時は自覚しなかった第二の悪夢が始まった。軍国青年に育つていったということ。どうして武器ぎらいの私が軍国主義になったのか。三木清が一九三九年の昭和研究会の名前で出した「新日本の思想原理」の中に、「時間的には資本主義の解決、空間的には東亜統一の実現」これが今度の戦争の意味であると書いてある。これにすっかりいかれちゃった。高校の文芸部に山本有一君（山本雄三の息子）がいてよく井の頭公園近くの家に行った。大きな書庫があり梯子の上まで危ない本が並んでいる。マルクスエンゲルス伝とか岩波文庫とか改造文庫とかをちよこちよこ読んでかなり左翼がかつていた。三木清は西田哲学とマルクス主義の間を歩んできた人で、私は彼の書いた

本を読んで、あつ！資本主義の解決とは社会主義への道何だと理解した。東亜の統一というのは、要するに米英帝国主義からのアジアの解放と言った。どちらもこれはまことに結構なことだと、左翼青年にとつても歓迎すべきことだと思つて飛びついた。実は、この時既に南京大虐殺があつた訳で三木が知らない訳はない。彼が獄中死をしてから一種の英雄になつてたけれど、私はどうしてもそれに納得できない、三木に騙されたと思つていた。同情的に解釈すれば、当時は非常に言論の統制がひどかつたからやむなくこういう表現をしたのだらうということになる。

今の問題に引き移してみると、言論は自由のほゞでこういう問題は起こらないはず。ところが、例えば中国脅威論についてよほどの勇気が無いと政治家は脅威が無いと言えない。昨年二月三日の朝日新聞トップ記事「中国軍が離島に上陸計画」は外交筋がしゃべつたことを書いた記事で、中国の軍部のごく一部にそういう声があるというだけ。新聞やテレビはやはり販売数とか視聴率を気にするから、弱腰の姿勢をとれば不利だ、強硬な姿勢をとれば有利だと判断している。そうすると、言論統制が強かつた時代の問題は「言論の自由がある」という今日でもある。

戦争では人を殺さないといけない

戦争は帝国主義を克服する道だと思つて支持していた。「兵隊さんよ、ありがとう」というスローガンがあり、そう思つていた。ところが、一九四三年になつて学徒出陣。私にはそれに反対する理由は無かつた。ところが、これはえらいことだ、戦争と言うのは人を殺さないといけないのだ。兵隊に入ると、軍の主とするのは戦闘なりと人を殺すことばかりを教えられ、言葉を失わされた。兵営の中で命令は絶対、是非を論じ理由を問うてはならない。便所に行きたい時、「石田二等兵、便所に行きます」というと「声が小さい」、「石田二等兵、便所に行きます」と声を上げると「その敬礼は何だ、軍隊の敬礼は15度」と命令され、漸く便所に行ける。とにかく生き延びるために「ハイ」といつているしかない。言葉を失つただただ上官の言うことを聞く。

現場からの距離

一年八カ月いる間に少尉になつた。自分でもこわくなるぐらいに、指揮官になると命令をする場合も上からの命令を下におろすだけで、自分で考えやいけない。現場から離れるほど二等兵から遠くなるほど、人殺しの感覚がだんだん少なくなつて行く。大隊本部の中隊長をやっていると、一時間戦争をすると、あと何時間かは書類を書く。弾は何発打つて、敵はどうしたとか。それを書くと実際に戦争している人と距離ができる、非常にこわいこと。それを認識したのは撃沈された敵機からパラシュートで東京湾に降りてきたパイロットを捕虜にした時。司令部に報告してお前のところで殺せと言われたら、国際法ゆえ殺せませんとは言えない、命令に背くと最高刑死刑ですから。ここで新ためて戦争というのは人を殺すことであることが分かつた。幸いなことに海軍が来てその捕虜を連れて行つたのでこちらの責任は無くなつたが。

やつぱり人殺しの現場から遠くなるとだんだん関心が薄くなる。武器を持つた抑止力が必要だと言うのは、使う人にとつてみればこんな厭なことには無い。だけれども、それが必要だと言うことを感じさせる、あるいはその危うさを意識させない、これが現場からの距離だと思ふ。時間的な距離もある。つまり六六年間日本の兵隊が人を殺したことが無い。だけどそれは直接的に殺したことが無いだけで、間接的には関わっている。イラク戦争における名古屋高裁の判決が示すように、如何にロジスティックサポートと言つたつて、実際には戦場に武器を持つていつて兵員を連れていつていく。アフガニスタンの場合もインド洋で支援した。現場からの距離により、武器というのは人を殺すものではなくて何となく役に立つものだということになる。ところが、持つていけば先制攻撃という形で使うことになり、いざれにしたつて武器と言うのは殺す以外に用途はない。そのことを忘れて抑止というのは非常に危険である。

「動的な」軍縮外交の復権を！——杉原浩司

昨夜「朝まで生テレビ」で抑止力が議論されていたので紹介する。孫崎

亮さんは、中国の軍事力は非常に強くなっていて米軍基地を狙う巡航ミサイルも沢山持っているから、日米安保で防ぐのは不可能だ、外交でがんばるしかない。森本敏さんは、自衛隊の防衛力と日米同盟で中国に対して抑止するのだ。長島昭久民主党議員は、中国に対しては経済的な相互依存が深まっているので、リスクをヘッジするために最悪の事態に備えた軍事力・日米安保が必要だという。最近のはやりがこの言い方だと思う。

新防衛大綱をめぐる議論で安保防衛懇談会の松田康博さん（東大）は、まさしく関与と備えであるという。いたずらに脅威論をおおるのはおかしい。なおかつ、話し合いでOKだということもおかしい。だから、最悪の事態に備えて、精強な自衛隊と強固な日米同盟を持つのだ、という。

防衛大綱について、気にしていることだけ述べる。「グレーゾーンへのシームレスな対処」で、平時でも戦時でもない時に継ぎ目のない対処をするという。それは、主権、領土、資源、エネルギー等をめぐる対立に対して自衛隊が役割を果たす。「常統監視」なる言葉のように、軍事演習で絶えず圧力をかけると。本来であれば外交でやるべき領域に自衛隊が浸食していく。長島さんが菅首相に尖閣諸島周辺で日米軍事演習をやれと提言して、自衛隊に新たな役割を与えようとしている。結局のところ、中国を押さえこむと言う戦略の中に、自衛隊が与那国島まで達する南西諸島を前線の盾としてそこに兵力を配置し監視し、米軍にとつての最初の盾になり、南西の壁として軍事力にシフトされている。

抑止力については日本ではあまり議論されていない。「抑止力を問う」（柳澤脇二、かもがわ出版）を読んだ。抑止力には、攻撃しても止める能力があるからやっても無駄という「拒否的抑止」（例…ミサイル防衛）と、攻撃したら耐えたい損害を与えるという「懲罰的抑止」（例…核兵器）がある。鳩山前首相の抑止力発言は、この議論からみても海兵隊には抑止力がない。実際には海兵隊は一年の半分はアフガニスタンや中東に行つて、ファルージャ等で様々な戦争犯罪をしてきている。石田さんのお話にあった、戦闘の行われているところとの空間的・時間的距離の中で、実際に米兵がやっている殺害行為と沖繩の存在というものが切れてしまっている。逆に日米安保は世界の公共財であるというような言い方がいつの間にか広

がっている。そこを私たちがどう反論して、脱抑止の方向に持つていけるかが問われている。この本は、屁理屈の塊だけれどたき台としては使える。

抑止論の信仰の中で、抑止と言うのは軍事力の役割を維持し続け、軍事競争の流れになる。脅威というならば、軍事力をお互いに縮小していく方向性でどれだけ私たち自身が説得的な提案ができるかが勝負になると思う。海に非武装地帯を作るとか、横須賀にあるイージス艦のトマホークの発射体制を解除するとか、ミサイル防衛を一方的に削減するとか、具体的な軍縮措置をカードにして中国の軍縮を迫るといふ、まっとうな提案を世の中に伝わりたくところできちんと発言していくような力をつけていくことが大切だと感じた。現状の構造を動かすような「動的な」軍縮外交の復権を！

抑止とイスラエル——田浪重央江

抑止力について、日本では非常に曖昧な概念で、冷戦構造の中で核抑止として考えられてきた。冷戦が終わって湾岸戦争の過程で、弾道ミサイルの重要性が知られるようになり、日本でも検討が始まって、二〇〇〇年代に入つて北朝鮮の脅威を利用してミサイル防衛の導入が決定された。

冷戦中の六〇年安保の時点で軍事力による抑止を問題にするのは難しかったのではないか。むしろ冷戦終結期に湾岸戦争をきっかけに国際貢献論が出てきたが、この時点で安保システムを大衆的な議論にのせられなかったことが問題なのではないかと思う。

パレスチナを占領し抑圧し中東の中で軍事的な脅威になっているイスラエルの存在と日本の社会を重ね合わせて議論したい。イスラエルは究極の抑止論が幅をきかせている国。一九五〇年代に作られた軍事方針が、防衛優位で諸外国との外交は重視しない、まず防衛力で優位に立つことが第一だと、それで周辺のアラブ諸国との関係も圧倒的な軍事力で対峙してイスラエルに対して攻撃する意欲を失わせる。一旦攻撃を受けたら不釣り合いに過剰な軍事力で報復する、国際世論は重視しない。いくらイスラエルを国際的に批判してもそもそもイスラエルはそれを無視する、孤立してもい

いのだという国。抑止を突き詰めていくようになってしまふ。湾岸戦争では、イスラエルはイラクからスカッドミサイルの攻撃を受けたが、イスラエルが圧倒的な軍事力を持つているという事実によってイスラエルの重要性をアメリカに再認識させ、湾岸戦争後アメリカがペルシャ湾に常駐するようになった。イランの脅威にさらされていた湾岸諸国にとって、アメリカが軍事的な押さえとして来てくれるようになった。その結果、イランが核開発するという流れになった。二〇〇六年にレバノン戦争があったが、そのあとイスラエルは、北のレバノンのヒズブーラのロケットとガザ地区のハマスのロケット弾を抑止する戦略として、最近アイロン・ドームというシステムを作った。鉄のドームというが、ロケット弾を迎え入れて捕捉して攻撃するシステム。弾道ミサイルをアメリカと共同開発して取り入れてきている。こういうものを導入しても結局は不十分だというのがイスラエルの主張で、二〇一一年のアメリカのオバマ政権からのイスラエルのミサイル防衛援助額が四億ドルを越えていて、昨年の二倍以上になっている。日本だけが北朝鮮や中国の「脅威」の中にあるわけではない、軍事力によって完全に相手の「脅威」を取り去るのではなく、多角的な関係・多様な手段の中で共存していく知恵を学び合うしかない。対米関係のみを重視し東アジアで孤立する日本と、中東におけるイスラエルはよく似ている。それぞれの悪いところを鏡としながら、そこを変えていく人たちと学び合う姿勢が必要だと思ふ。

相互討論からの補足

石田雄 六〇年安保で沖縄を問題にしなかったのは大きな過ちだった。冷戦下は、相互確証破壊MADの時代で、日米民間人会議においてハーマン・カーンが、もしもソ連が攻撃してきたら何分間に何メガデス(Mega death)の報復をすることができるといふことをとうとうと論じた。メガデスとは百万人の死で広島・長崎の一ケタ上。メガデスの死が対抗していたから恐怖の均衡が保てていた。ソ連が崩壊し、ヨーロッパでは体制間の緊張が無くなった。アジアでは体制間の緊張が残りながら、しかし全体と

して見れば非対称的な敵にどう対応するかとなる。そこで問題になるのが、安保の内容の変化。九六年の日米共同宣言、九七年のガイドライン、九九年の周辺事態法と。二〇〇五年の「日米同盟…未来のための変革と再編」で日米両国の軍事的なコネクティビティ連接とインタールオペラビリティ相互運用性が主張された。これは、日本の自衛隊がアメリカの思うままに動くということ。ただ一つ歯止めがかかっているのは、憲法上の制約があるからチャンチャンバラバラはできませんと、だからロジスティックサポートをする。それは日本の抑止のためではない、アメリカ軍のお手伝いをするための自衛隊。

そもそも抑止というのはできるものではない、非対称的な見えない敵には抑止が効かないのははつきりしている。スペインやロンドンのテロから分かるように、テロという恐怖は抑止力では防げない。中村哲さんのペシワール会の支援が明らかにするように、信頼を醸成して貧困からの脱却を助けることが鍵になる。アメリカのためにテロとの戦いをやるということは、危険を高めることになっても、危険を防ぐことには全くならない。問題はそのことをどうしたら多くの人に知ってもらえるのか。国家の安全保障という言葉の魔術にどうしたら引つかからないで済むか。

戦前から抑止論があった。戦後に取り締り論として再生産され、その後予防論になつてきた。問題になるのは国境線の問題で。戦前は満州鉄道も日本の領土の延長だったところに中国軍が来た、それに抵抗したと称してそこを占領した。領土問題も、漁民にとつてみれば平穩に漁ができることが大事なので、台風が来たらどこにでも立ち寄りつていた。国境線という人工的な線を問題にすることは軍隊の利益を守るため。辺野古の問題も軍産複合体が儲けるために大変だ大変だと国際的緊張を高めている。政治家は海外強行論をいうことによって自分の支持を高めようとして、最後にはそれによって首を絞められてしまふ。問題は、どういう形でそれを民衆が押さえるか。

——他にも、刀狩、アメリカ建国の歴史、反グロバリズム運動、口ポット攻撃、などなど、抑止を軸に多岐にわたつて問題提起・議論されたが、紙面の都合で割愛した。(木村)